

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：23501

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18474

研究課題名（和文）19世紀の日本美術史・西洋美術史・自然史の方法に関する研究

研究課題名（英文）Study on the methods of Japanese Art History, Western Art History and Natural History in the nineteenth century

研究代表者

加藤 弘子（KATO, HIROKO）

都留文科大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：70600063

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,500,000円

研究成果の概要（和文）：美術史の 様式 style と自然史の 種 species という2つの学術領域の根幹をなす基礎概念を手掛かりに、19世紀、近代諸学問の黎明期に、ウィリアム・アンダーソンが日本美術史構築に適用した西洋美術史および自然史の方法とその関係を探った。また、当時のジャパノロジスト（外国人日本研究者）による考古学・人類学など隣接分野の縄文・アイヌ研究と近年の分子生物学の成果から、現在の最大の課題として、縄文土器に代表される縄文美術を 和人 と 本土日本 中心に記述した日本美術史の原点とすることには問題があり、脱中心化 する必要があると指摘して、今後の研究の方法と方向性をあきらかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

美術史と自然史、考古学、人類学、民族学など、近代に分化した諸学問との関係から19世紀のジャパノロジスト（外国人日本研究者）による研究を捉え直し、これまで見過ごされていた縄文とアイヌに関する日本美術史の課題をあきらかにした点に学術的意義がある。また、19世紀から続く単一の 起源 への強い関心からシフトして、日本美術史における 中心 と 周縁 の関係を問い直したことによって、今後の教育や出版などに注意を喚起し、日本の多文化社会への理解を促進する可能性がある点に、社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Using the basic concepts underlying the two academic fields of 'style' in art history and 'species' in Natural history as a clue, I explored the methods and relationships between Western art history and Natural history, which William Anderson applied to the construction of 'Japanese art history' in the 19th century, at the dawn of modern scholarship. My research into archaeological, anthropological and other Jomon and Ainu research by Japanologists of the time, as well as the results of recent molecular biology, revealed that the biggest problem at present is the description of 'Japanese art history' as centred on wajin and mainland Japanese art, with Jomon art, as represented by Jomon pottery, as the origin of 'Japanese art history'. By pointing out the need to 'de-centre' Japanese art history, I have clarified the methods and direction of future research.

研究分野：日本美術史

キーワード：日本美術史 西洋美術史 自然史 考古学 人類学 アイヌ 縄文 ジャポニスム

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

※近代学問の草創期が研究対象のため、以下の報告の一部に、現代では不適切な用語を含む。

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 初期の日本美術史概説書研究の重要性

ウィリアム・アンダーソン (William Anderson 1842-1900) は、明治初期に海軍医学校に招聘された外科医で、大英博物館の日本美術コレクションの基礎を築いた日本美術研究者である。彼が1886年に『大英博物館所蔵日本・中国絵画目録 (*Descriptive and Historical Catalogue of a Collection of Japanese and Chinese Paintings in the British Museum*)』と共に出版した『日本の絵画芸術 (*The Pictorial Arts of Japan*)』(図1)は、1880年代に外国人によって刊行された本格的な日本美術史概説書に位置づけられ、草創期の日本美術史を考える上で重要な研究対象である。本書は1900年のパリ万博用に編纂された『日本美術史 (*Histoire de l'art du Japon*)』以前に刊行され、末松謙澄訳・補『日本美術全書沿革門・応用門』(八尾商店、1896・1897年)として日本語版が出版されたことから、その後の政府主導の〈日本美術史〉へ及ぼした影響の観点からも注目されてきた。

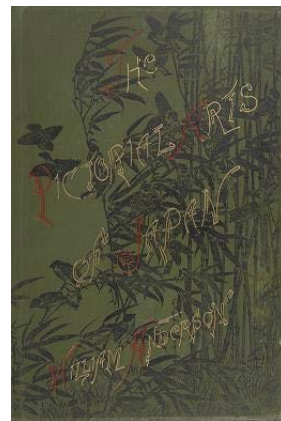


図1 ウィリアム・アンダーソン『日本の絵画芸術』1886年

#### (2) 美術史の方法に対する疑問

代表者はこれまで江戸時代の写生図、模写図などの絵画資料を中心に研究を行い、流派を超えて図像が共有されていた実態や、流派間の関係を確認してきた。流派を超えて図像が共有された理由の1つに、日本では室町時代から中国名画の構図や描写に倣って描く〈筆様制作〉の伝統があり、絵師は注文主の求めに応じて複数の様式を描き分ける必要があった。こうした絵画制作のあり方は、狩野派のやまと絵制作や、琳派などの諸派が内包する多様な作例にみられるように、西洋美術史で成立した〈様式 style〉や〈流派 school〉といった基礎概念を、近代以前の日本美術に厳密に適用することを難しくさせており、美術史の方法に対する疑問があった。

#### (3) 一国美術史から東アジア美術史への転換期

現在は、近代国家成立後に一国美術史として編纂された従来の〈日本美術史〉から、より広い視野で日本を含む〈東アジア美術史〉の構築が始まった転換期にあたり、〈日本美術史〉の草創期を振り返り、自明のこととして受け入れてきた従来の研究方法を再確認する必要があった。こうした中で、イギリス美術史学会 (AAH2015) の「〈東アジア美術〉は可能か？」と題したパネルで、〈様式 style〉〈流派 school〉〈種 species〉の概念に注目してウィリアム・アンダーソンの東アジア美術史観について発表した際に、上記の日本美術史概説書を対象として、当時の自然史(博物学)と共通する基礎概念や方法を確認する探索的な研究を構想するに至った。

### 2. 研究の目的

本研究は、美術史の〈様式 style〉と自然史の〈種 species〉というふたつの学術領域の根幹をなす基礎概念を手掛かりに、ウィリアム・アンダーソンの日本美術史構築に適用された西洋美術史および自然史の基礎的方法とその関係を探るものであった。19世紀末までに日本を含む東アジアにおいて蒐集された膨大な美術品と動植物の標本は、ほぼ同時代に共通の眼差しで蒐集・目録化されており、草創期の日本美術史構築に適用された西洋美術史と自然史の手法には共通点があったと考えられる。最終的には、今後の日本および東アジア美術史構築に向けて、研究方法の見直しを目的として本研究をスタートした。

### 3. 研究の方法

(1) 19世紀の西洋美術史における〈様式 style〉〈流派 school〉といった基礎概念を確認するため、フランツ・クーグラー (Franz Theodor Kugler 1808-1858) の『絵画史案内 (*A hand-book of the history of painting : from the age of Constantine the Great to the present time*)』(1842-1846)などの概説書(図2)を対象に、作品の〈様式 style〉解釈や〈流派 school〉分類がどのように判断されていたかを分析した。この概説書は駐日イギリス外交官アーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow 1843-1929) とアルバート・ホーズ (Albert George Sidney Hawes -1897) の共編著でアンダーソンも執筆した『中部および北部日本旅行案内 (*A handbook for travellers in central & northern Japan*)』を改訂再版(1884)から引き継いだジョン・マレー社の出版であり、英語版はイギリスで版を重ねたため、アンダーソンは参照したと想定した。



図2 フランツ・クーグラー『イタリア諸派絵画案内』第3版 1855年

(2) 大英博物館の「中国日本絵画展」に協力し、日本の鳥類学を開いた鳥類学者であるヘンリー・シーボーム (Henry Seebohm 1832-1895) の日本鳥類概説書『日本帝国の鳥類 (*The birds of the Japanese Empire*)』(1890) および関連の鳥類目録を対象に、標本の〈種 species〉の解釈や〈亜種 subspecies〉の分類がどのように判断されていたのかを分析した。19世紀の鳥類目録には標本所蔵先の管理番号が表記されていなかったため、参照した標本を特定することはできなかったが、19世紀の命名法と分類に混乱と変遷があったことは確認できた。

(3) アンダーソンの日本美術史概説書『日本の絵画芸術』、『大英博物館所蔵日本・中国絵画目録』、『中国日本絵画展案内』を対象に、作品の〈様式 style〉解釈や〈流派 school〉分類がどのように判断されていたかを分析した。『日本の絵画芸術』は復刻版が刊行されているものの、末松謙澄による邦訳は既に古く、民族、統治、領土に関わる明治政府に不都合な記述は省略されているため、原著と邦訳を照合しながら第I部の翻訳を進めた。この翻訳の際に、考古学や人類学など自然史以外の関連分野の調査が必要となったため、追加して研究計画を見直した。

#### 4. 研究成果

主な研究成果は次の3点に集約される。研究計画変更後の成果である(3)を中心に報告する。

(1) 草創期の日本美術史研究の方法と西洋美術史・自然史との関係を確認

大英博物館所蔵のアンダーソン・コレクションに、日本美術史を体系的に例示しようとする分類学的な完璧さを求める特徴があることは、早くから遠藤望や彬子女王が指摘してきた<sup>1</sup>。この特徴は駐日イタリア公使アレッサンドロ・フェ・ドスティアーニ (Conte Alessandro Fè d' Ostiani 1825-1905) 旧蔵品など同時期の他のコレクションと比較しても明らかであった。

アンダーソンが〈種 species〉の間の系統関係を推測するように、〈様式 style〉から作品や流派の関係、中国絵画と日本絵画との関係を推測したのは、基本的には美術史の様式論が自然史(博物学)をモデルにして構築されていたからである。作家の列伝史から作品の様式史へと舵をきった美術史家のヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン (Johann Joachim Winckelmann 1717-1768) にはジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ド・ビュフォン (Georges-Louis Leclerc, comte de Buffon 1707-1788) の『博物誌 (*Histoire naturelle générale et particulière*)』からの影響が読み取れ、ヴィンケルマンにとっての〈様式 style〉がビュフォンにとっての〈種 species〉であったことについては、美術史家のカール・ユスティ (Carl Justi 1832-1912) や歴史家のカルロ・ギンズブルグ (Carlo Ginzburg 1939-) が言及している<sup>2</sup>。

また、日本絵画の〈起源 origin〉として中国絵画を提示し、絵画の様式を進化し、分化していく〈種 species〉のように捉える視点と方法には、チャールズ・ダーウィン (Charles Robert Darwin 1809-1882) の影響を想定してきた。これに加えて、新種や新亜種を発見・報告するように、まだ知られていない作者や作品を記載し、複数の〈様式 style〉を備えると判断した絵画を〈eclectic〉と評した背景には、建築や絵画の〈折衷主義〉〈折衷派〉を評価する当時のイギリスにおける価値観があった。

(2) 日本美術史・自然史研究と標本蒐集へのアーネスト・サトウの貢献を確認

当初、アンダーソンはサトウとの共著として日本美術史概説書を計画しており、2人の関西古美術調査旅行の詳細や<sup>3</sup>、アンダーソンにとってサトウを超える協力者はいなかったこと<sup>4</sup>、蔵書をめぐる2人の動向<sup>5</sup>などの研究が鈴木廣之、村角紀子、小山騰によって進められてきた。

その上で、改めて『日本の絵画芸術』『大英博物館所蔵日本中国絵画目録』刊行の経緯をイアン・ラクストンが翻刻・注釈したサトウの日記と手紙から確認した結果、その貢献は予想以上に大きいものであった。サトウは日本美術のモチーフ(主題)を説明するための資料の大部分の収集を引き受けた<sup>6</sup>が、これは作品を記述する上で最も重要な情報である。彼はアンダーソンからモチーフの研究に取り組むようしきりに促され、「手伝うと約束しなければよかった<sup>7</sup>」と友人への手紙の中で後悔を吐露しながら膨大な和書を解読し、共著での出版を断念した後もロンドンのアンダーソンと同じ仕事場で最後まで協力を続けていた。既に指摘されているとおり、サトウは大英博物館のロバート・ダグラス (Robert Kennaway Douglas 1838-1913) の和書目録作成に協力し、蔵書を館に売却しているので、今後も両者の活動はあわせて捉えていく必要がある。

また、日本各地を旅したサトウは標本採集を楽しむナチュラリストでもあった。来日していた採集家たちの他に、ダーウィンの親友でキュー植物園長のジョセフ・ダルトン・フッカー (Joseph Dalton Hooker 1817-1911) や大英博物館動物学部のアルベルト・ギュンター (Albert Günther 1830-1914)、プロイセンの地理学者で日本の動植物を蒐集したヨハネス・ユストゥス・ライン (Johannes Justus Rein 1835-1918) と交流し、日本の動植物や標本の作製法について情報交換をしていた。「魚類は蝦夷産以外は不要。四国と九州の哺乳類はまだ募集中<sup>8</sup>」などの記述からは、サトウが日本の自然史標本蒐集の一端を担う仲介者の役割を果たしていた様子がうかがえた。

(3) 現在の〈日本美術史〉が縄文の美術を原点とすることの問題点を確認

計画変更で追加した隣接分野の日本考古学・人類学など19世紀のジャパノロジストによる縄文土器・アイヌ研究と近年の分子生物学の成果から、縄文土器に代表される縄文の美術を〈本土

日本」と〈和人〉中心に記述した〈日本美術史〉の原点とすることの問題点をあきらかにした。

1900年のパリ万博用に編纂された初の官製『日本美術史 (*Histoire de l'art du Japon*)』とその日本語版『稿本日本帝国美術略史』(1901)の第一編第一章は国体論から始まる。創世神話をもとに、他姓の部族を雑「まじ」えることがなかったと、その純血性を強調し、「故に我が国民は即ち一大家族なり。一民族の団結せるなり」と、単一民族神話にもとづいて〈日本美術史〉を説き始めている。こうした「単一民族説」(単一民族神話)あるいは「混合民族説」は現在の〈日本美術史〉の中に根強く存在し、縄文の〈美〉と〈日本〉〈日本人〉のアイデンティティとを結びつける言説や、縄文と弥生の造形のハイブリッドを評価する言説が、一般向けの書籍や概説書、美術全集に確認できる。最大の問題は「アイヌの形態的特徴や遺伝的特徴はアイヌ民族が縄文文化の担い手だった人々と直接的な関係を持つことを示している<sup>9)</sup>」と公式に認められているにもかかわらず、縄文時代の美術を〈本土日本〉と〈和人〉中心に記述した〈日本美術史〉の原点・起源としている点である。

医師のエルヴィン・フォン・ベルツ (Erwin von Baelz 1849 - 1913) は、アイヌと琉球人が同系で、縄文人の直系の子孫とする「アイヌ・琉球同系説」を唱えた。このベルツの「アイヌ・琉球同系説」に始まり、鳥居龍蔵 (1870 - 1953) らが提唱した「混血説」を受け継ぎ、現在まで広く受け入れられてきた「日本人形成論」の定説が、埴原和郎 (1927-2004) の「二重構造モデル」(図3)である。その内容は、まず東南アジアなどから北上し日本列島に来た集団が、列島全域で均質な形質を持つ縄文人となったと仮定する。一方、大陸を北上した集団は寒冷地に適応して変化、北東アジア人となり、弥生時代に朝鮮半島を経由して渡来した。これら2つの集団は日本列島内で徐々に混血し、その過程は現在も進行中で、日本人は二重構造を持っているという<sup>10)</sup>。

これは戦後に新しい日本史を発展段階的な視点で記述した際の歴史用語・概念である「縄文」「弥生」の図式と同様であり、その後のミトコンドリア DNA や近年の核 DNA の研究成果は、基本的にはこの「二重構造モデル」を裏付けてきた。縄文時代の人々は現代のアイヌ、沖縄、本土日本人に共通した祖先の一つではあるが、近年の解析でアイヌが最も縄文人の DNA を受け継いでいることが判明しており、その割合はアイヌ 70%、沖縄 30%、本土日本人 (和人) 10%程度とされている。この結果について、自然人類学者の篠田謙一 (1955-) は「少なくとも本土の現代日本人に関しては渡来した人々の影響が非常に大きく、ルーツを考えるのであれば、主に朝鮮半島に起源を持つ集団が渡来することによって、日本列島の在地の集団を飲み込んで成立した、と考える方が事実を正確に表している」<sup>11)</sup>と述べている。

いずれにしても、遠い過去の人々の美術や文化を、現在の国民、国家のアイデンティティの決定要因として用いるべきではなく、一国美術史として〈日本美術史〉を教え、学ぶ際には注意が必要である。なぜなら、縄文時代の美術を〈本土日本〉と〈和人〉中心の〈日本美術〉の原点とし、その〈美〉を〈日本〉や〈日本人〉のアイデンティティと結びつける現在の〈日本美術史〉に支配的な学問様式は、それと気づかないまま、アイヌの人々の歴史と文化を二重に搾取している可能性があるからである。

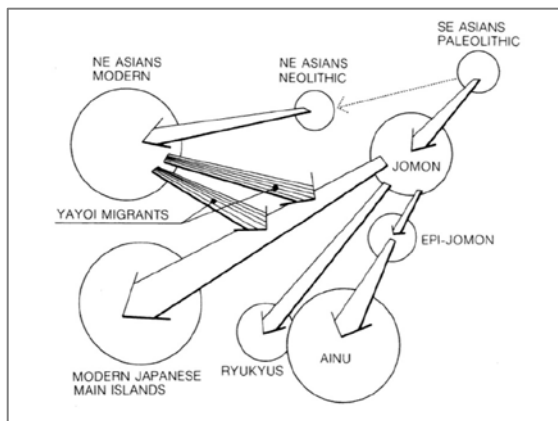


図3 Fig. 11. Schematic diagram showing the formation process of Japanese groups. Source: HANIHARA, Kazuro. "Dual Structure Model for the Population History of the Japanese." *Japan Review*, no. 2 (1991): 1-33.

#### <引用文献>

1 遠藤望「大英博物館所蔵アンダーソン・コレクション調査報告」『ジャポネズリー研究会会報』12、1992年および彬子女王「標本から美術へ—十九世紀の日本美術品蒐集、特にアンダーソン・コレクションの意義について」『國華』1360号、2009年

2 Ginzburg, Carlo. *Wooden Eyes: Nine Reflections on Distance*, Columbia University Press, 2001, p. 120.

3 鈴木廣之「誰が日本美術史をつくったのか?—明治初期における旅と収集と書き物—」『比較日本学研究会研究年報』4、2008年および鈴木廣之編『19世紀日欧米比較による「日本美術史」形成史の研究』(平成24~26年度科学研究費補助金研究成果報告書 基盤研究(C)(一般))、2015年



4 村角紀子「19世紀末における〈日本美術史〉資料収集のネットワーク—ウィリアム・アンダーソン旧蔵和漢籍を中心に—」『鹿島美術研究年報』27号別冊、2010年および村角紀子「ウィリアム・アンダーソンと『仏像図彙』—〈日本美術史〉形成期における欧文日本研究書の位置」『美術史』173、2012年10月

5 小山騰『アーネスト・サトウと蔵書の行方—『増補浮世絵類考』の来歴をめぐって』勉誠出版、2020年

6 ディキンズ宛 1881年1月25日付「私が日本美術のモチーフ（主題）を説明するための資料の大部分を集めることを引き受けたのは多分ご存じと思いますが、現在、執筆に関してはガイドブックの仕事が完了したので、暇をみつけてはアンダーソンのためにその仕事に取り組んでいます」“You know I daresay that I have undertaken to collect the greater part of the materials for giving an account of the motifs of Japanese art, and am working at that for Anderson in my odd leisure, now that the guidebook is finished as far as the writing of it is concerned.” Ruxton, Ian. *Sir Ernest Satow's Private Letters, Volume One: Letters to W. G. Aston and F. V. Dickins: Correspondence of a pioneer Japanologist, 1870-1918*, p.135. Kindle 版.

7 アストン宛 1880年12月19日付「アンダーソンはまだいつか出版社を見つけたいと思っています、私にモチーフ（主題）の研究を続けるようしきりに促します。そのためには珍しい本を大量に読みあさる必要がありますが、それは何の役にも立たないし、手伝うと約束しなければよかったです」(原文) “Anderson still hopes some day or other to find a publisher, and is constantly urging me to go on working at the motives. They require a great deal of miscellaneous desultory reading in out of the way books, which does one no good, and I wish I had never promised to help.”

アストン宛 1881年2月28日付「今はアンダーソンとの約束で、彼が日本美術のモチーフ（主題）を説明するために与えようとしている伝説や歴史に協力することになっています。私はこの仕事を初期の歴史書を読み、珍しい用法や言葉を記すという、私自身のために使うこともありますが、決して日の目を見ないかもしれないものの資料を集めるために、こうして時間を費やさなければならないことを非常に残念に思います。というのも、アンダーソンはまだ出版社を見つけておらず、その可能性もあまりないと思うからです。むしろ、美術の勉強をやめて専門の仕事をした方が、彼の将来のためになる。患者を探すコンサルタント外科医にとって、自分が美術に関する生きた参考書であると知られることは、何の役にも立たない。このような副業が許されるのは、その人がすでに地位を確立しているときだけです」(原文) “now I am under a promise to Anderson to help him with the legends and history which he wants to give as explanatory of the motives of Japanese art. I convert this work partly to my own use in reading the early histories, and noting out of the way usages and words, but very much regret the time that has thus to be spent in gathering materials for what may never see the light; for Anderson has not yet found a publisher, and I am afraid has not much chance. In fact, it would be better for his prospects if he gave up art studies, and pushed his professional practice. It cannot be of any use to a consulting surgeon in search of patients to have it known that he is a living book of reference on art. Such side pursuits are only allowable when a man has already achieved his position.” Ibid., pp.43, 44, 47.

8 1876年10月19日付日記「ラインの手紙を大英博物館動物学部キーパーのギュンター博士に渡した。魚類は蝦夷産以外は不要。四国と九州の哺乳類はまだ募集中。シーボルトの『日本動物誌』を入手するよう私に助言してくれたが、江戸の英国公使館は所蔵していないと聞いて驚いていた」(原文) “Presented Rein's letter to Dr. Günther, Keeper of the Zoological Department at the Brit[ish]: Mus[eum]: No fishes wanted, except perh[aps]. from Yezo [Hokkaidō]. Mammalia of Shikoku and Kiushiu still wanted. Advised me to procure Siebold's works on the Japanese Fauna and was shocked to hear that the British Legation in Yedo does not possess a copy.” Ruxton, Ian, ed. *A Diplomat in Japan Part II: The Diaries of Ernest Satow, 1870-1883*, Lulu Press Inc., 2009, p.186.

9 日本学術会議 地域研究委員会 人類学分科会『報告 アイヌ政策のあり方と国民的理解』2011年9月15日、日本学術会議、p.2、2023年6月6日最終閲覧、<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-h133-1.pdf>

10 Hanihara, Kazuro. “Dual Structure Model for the Population History of the Japanese.” *Japan Review*, no. 2, 1991, pp.1-33 および埴原和郎「特別寄稿 二重構造モデル：日本人集団の形成に関わる一仮説」『Anthropological Science』102巻5号、1994年、455-477頁

11 篠田謙一『人類の起源』中央公論新社、2022年、212頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加藤弘子	4. 巻 9
2. 論文標題 円山応挙筆「藤花図屏風」 制作とその意味	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 根津美術館紀要『此君』	6. 最初と最後の頁 41～64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Hiroko Kato
2. 発表標題 The Origins of Japanese Art: the Jomon and the Ainu (Session Title: Decentering "Japanese Art History": Rethinking Periodization, Geography, and Historiography)
3. 学会等名 Association for Asian Studies 2022 Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小田原のどか・山本浩貴 編著, 足立元, 千葉慶, 穂積利明, 飯山由貴, 加藤弘子, 北原恵, 琴仙姫, 吉良智子, 小金沢智, 小泉明郎, 國盛麻衣佳, 菊池裕子, 馬定延, マユンキキ, 中嶋泉, 長津結一郎, 大坂紘一郎, 嶋田美子, 富澤ケイ愛理子, 吉國元	4. 発行年 2023年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 -
3. 書名 この国〔近代日本〕の芸術 「日本美術史」を脱帝国主義化する	

1. 著者名 楠田哲士編, 中村浩志, 秋葉由紀, 浅川満彦, 朝倉俊治, 浅野 玄, 池田 敬, 石井信夫, 石井裕之, 石原祐司, 岩見恭子, 牛田一成, 太田能之, 大塚之稔, 大屋賢司, 奥山正樹, 尾関雅章, 加藤弘子, 金原弘武, 楠田哲士, 国松俊英, 蔵本洋介, 栗林勇太, 黒江美紗子, 小林 篤, 小林正直, 小宮輝之ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 緑書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 神の鳥ライチョウの生態と保全 日本の宝を未来へつなぐ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

加藤弘子, 富澤ケイ愛理子「日本美術史の脱中心化 アイヌ、沖縄」『この国〔近代日本〕の芸術』第1回オンライン連続講義, 2023年8月10日

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉澤 早苗  (YOSHIZAWA SANAE)  (00600719)	東京藝術大学・美術学部・講師    (12606)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	村角 紀子  (MURAKADO Noriko)		平成29年度～令和元年度
研究協力者	松崎 未来  (MATSUZAKI Mirai)		令和2年度～3年度
研究協力者	富澤ケイ 愛理子  (TOMIZAWA-KAY Eriko)		令和3年度～令和4年度

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------